

大阪まで

泉鏡太郎

青空文庫

これは喜多八の旅の覺書である——

今年三月の半ばより、東京市中穩かならず、天然痘

流行につき、其方此方から注意をされて、身體髪膚これを父

母にうけたり敢て損ひ毀らざるを、と其の父母は扱て在さねども、

……生命は惜しし、痘痕は恐し、臆病未練の孝行息子。

三月のはじめ、御近所のお醫師に參つて、つゝましく、

しをらしく、但し餘り見榮のせぬ男の二の腕をあらはにして、神

妙に種痘を濟ませ、

「おとなしくなさい、はゝゝ。」と國手ドクトルに笑わらはれて、「はい。」と袖そでをおさへて歸かへると、其その晩ばんあたりから、此この何年なんねんにもつひぞない、妙めうな、不思議ふしぎな心こゝろもち持もに成なる。——たとへば、擦くすくつたいやうな、痒かゆいやうな、熱あついやうな、寒さむいやうな、嬉うれしいやうな、悲かなしいやうな、心こゝろぼそ細こいやうな、寂さびしいやうな、もの懐なつかしくて、果敢はかなくて、たよりのない、誰たれかに逢あひたいやうな、焦じれつたい、苛いら々くしながら、たわいのない、恰あたかも盆ぼんとお正しやうぐわつ月おまつりと祭禮おまつりを、もう幾いくつ寝ねると、と前まへに控ひかへて、そして小遣錢こづかひせんのない處ところへ、ボーンと夕暮ゆふぐれの鐘かねを聞きくやうで、何なんとも以もつて遣瀨やるせがない。

勉強べんきやうは出來できず、稼業かせふの仕事しごとは抄取はかどらず、持餘もてあました身體からだを春寒はるさむの炬燵こたつへ投はふり込こんで、引被ひつかついでぞ居あたりけるが、時とき／＼

々、かけぶとん掛蒲團の襟えりから顔かほを出だして、あゝ、うゝ、と歎息ためいきして、

ふう、と氣味きみ悪わるく鼻はなの鳴なるのが、三井寺みいでらへ行いかうでない、金子かねが

欲ほしいと聞きこえる。……

とちぶた綴蓋にようぼうの女房せまが狭だいどころい臺所そうざいで、總菜はうれんさうの蒔蓼草そろを揃そろへ

ながら、

「また鼻はなが鳴なりますね……澤山たんとさ然さうなさい、中屋なかやの小僧こぞうに遣やつ了ちま

ふから……」

「眞平まつびらごめん御免ごめん。」

と蒲團ふとんをすつぽり、炬燵こたつやぐら櫓あしの脚つまさきを爪尖つねで抓つかつて居ゐて、庖はうち

丁やうの音おとの聞きこえる時とき、徐々そろくと又頭またたまを出だし、一ひとつ寢返ねがへつて腹はら這はひ

で、

「何か甘いもの。」

「拳固……… 抓り餅、……… 赤いお團子。……… それが可厭なら蝦蛄の天麩羅。」と、一ツづゝ句切つて憎體らしく節をつける。

「御免々々。」と又潜る。

其のまゝ、うとくして居ると、種痘の爲す業とて、如何にも防ぎかねて、つい、何時の間にか鼻が鳴る。

女房は鐵瓶の下を見かた／＼、次の間の長火鉢の前へ出張に及んで、

「お前さん、お正月から唄に謠つて居るんぢやありませんか。

——一層一思ひに大阪へ行つて、矢太さんや、源太さんに逢つて、我儘を言つていらつしやいな。」

と、先方が男だから可恐く氣前が好い。

「だがね……」

工面の悪い事は、女房も一ツ世帯でお互である。

二日も三日も同じやうな御惱氣の續いた處、三月十日、午

後からしよぼくと雨になつて、薄暗い炬燵の周圍へ、別して

邪氣の漾ふ中で、女房は箆笥の抽斗をがたくと開けたり、

葛籠の蓋を取つたり、着換の綻を検べたり、……洗つた足袋を裏

返したり、女中を買ものに出したり、何か小氣轉に立つ

て居たと思ふと、晩酌に乾もので一合つけた時、甚だ其の

見事でない、箱根土産の、更紗の小さな信玄袋を座蒲團の傍

へ持出して、トンと置いて、

「楊枝、齒磨……半紙。」

と、口のかぐりを一寸解いて、俯向いて、中を見せつゝ、

「手巾の洗つたの、ビスミツト、紙に包んでありますよ。寶

丹、鶯懷爐、それから膝栗毛が一冊、いつも旅と云

ふと持つておいでなさいますが、何になるんです。」

「道中の魔除に成るのさ。」

鶯懷爐で春めいた處へ、膝栗毛で少し氣勢つて、熱

爛で蟲を壓へた。

「しかし、一件は？」

「紙入に入つて居ます、小さいのが蝦蟇口……」

と此の分だけは、鱧皮の大分膨んだのを、自分の晝夜帯か

ら抽出して、袱紗包みと一所に信玄袋に差添へて、
 「大丈夫、往復の分と、中二日、何處かで一杯飲めるだ
 け。……宿は何うせ矢太さんの高等御下宿にお世話様に成
 んでせう。」

傳へ聞く……旅館以下にして、下宿屋以上、所謂其の高
 等御下宿なるものは——東區某町と言ふのにあつて、
 その處から保險會社に通勤する、最も支店長格で、年は
 少いが、喜多八には過ぎた、お友達の紳士である。で、中二
 日と數へたのは、やがて十四日には、自分も幹事の片端を
 承つた義理の宴會が一つあつた。

「……緩り御飯をめしあがれ、それでも七時の急行に間に合ひ

ますわ。」

澄すました顔かほで、長煙管ながぎせるで一服いっぷくスツと吹ふく時とき、風かぜが添そつて、
ざつざつと言いふ雨風あめかぜに成なつた。家やの内うちではない、戸外おもてである、
暴模様あれもやうの篠しのつく大雨おほあめ。……

二

「何どうだらう、車夫わかいしゆ、車夫わかいしゆ——車くるまが打覆ぶつかへりはしないだらうか。」

俾くるまかすみが霞せきヶ關かへ掛かつて、黒田くろだの海鼠壁なまこかべと云いふ昔むかしからの難所なんしよを乗のる時分じぶんには、馬うまたてが鬣がみを振ふるが如ごとく幌ほろが揺ゆれた。……此この雨風あめかぜ

に猶豫つて、いぎと云ふ間際にも、尚ほ卑怯に、さて發程うか、止めようかで、七時の其の急行の時期を過ぎし、九時にも間に合ふか、合ふまいか。

「もし、些と急がないと、平常なら、何、大丈夫ですが、此の吹降で、途中手間が取れますから。」

「可し。」と決然とし、長火鉢の前を離れたは可いが、餘り爽かならぬ扮装で、

「可厭に成つたら引返さう。」

「あゝ、然うなさいましともさ。——では、行つて入らつしやい。で、漸つと出掛けた。」

車夫は雨風にぼやけた聲して、

「大丈夫ですよ。」

雖然、曳惱んで、ともすれば向風に押戻されさうに

成る。暗闇は大なる淵の如し。……前途の覺束なさ。何うや

ら九時の間に間に合ひさうに思はれぬ。まゝよ、一分でも乗後

れたら停車場から引返さう、それが可い、と目指す大阪を

敵に取つて、何うも恚うはじめから豫定の退却を畫策す

ると云ふのは、案ずるに懷中のためではない。膝に乗せた信

玄袋の名ゆゑである。願くはこれを謙信袋と改めたい。

土橋を斜に烏森、と町もおどろくしく、やがて新橋驛

へ着いて、づぶくと其の濡幌を疊んで出で、※と明く成つた

處は、暴風雨の船に燈明臺、人影黒く、すたくくと疎らに

往來ふ。

「間に合ひましたぜ。」

「御苦勞でした。」

際きはどい處どころか、發車はつしやには未だ三分間さんぶんかんある。切符きつぷを買かつて、改か札口いさつぐちを出でて、精々せい／＼、着きた切きりの裾すそへ泥撥どろはねを上げあげないやうに、濡ぬれた石壇いしだんをあがると、一面雨いちめんあめの中なかに、不知火しらぬひの浮ういて漾たゞよふ都みやこやこおほちでんとう大おほ路ぢの電燈でんとうを見みながら、横繁吹よこしぶきに吹ふきつけられて、待合まちあひ所じよの硝子戸がらすどへ入はひ入いるまで、其その割わりに急いそがないで差支さしつかへぬ。……

三分間さんぶんかんもあだには成ならない。

處ところへ、横よこづけに成なつた汽車きしやは、大おほきくろい縁側えんがはが颯さつと流ながれついでた趣おもむきである。

「おつと、助船。」

と最う恚う成れば度胸を据ゑて、洒落れて乗る。……室はい

づれも、舞臺のない、大入の劇場ぐらゐに籠んで居たが、

幸ひに、喜多八懐中も輕ければ、身も輕い。荷物はなし、お

剩に洋杖が細い。鯨と鯨の中へ、芝海老の如く、呑まれぬばか

りに割込んで、一つ吻と呼吸について、橋場、今戸の朝煙、

賤ヶ伏屋の夕霞、と煙を眺めて、ほつねんと煙草を喫む。

……品川へ來て忘れたる事ばかり——なんぞ何もなし。大

森を越すあたりであつた。……

「もしく、此の電報を一つお願ひ申したうございます。」

列車の給仕の少年は——逢ひに行く——東區某町、

矢太さんの右の高等御下宿へあてた言句を見ながら、

「え、此の列車では横濱で電報を扱ひません、——大

船で打ちますから。」

と器用な手つきで、腹から拔出したやうに横衣兜の時計を見

たが、

「時間外に成るんですが。」

「は、結構でございます。」

「記號を入れますよ、ら、ら、」と、紐のついた鉛筆で一

記して、

「それだけ賃錢が餘分に成ります。」

「はいく。」

此の電報の着いたのは、翌日の午前十時過ぎであつた。

三

おほふな 大船に停車の時、窓に立つて、逗子の方に向ひ、うちつけ
 ながら某がお馴染にておはします、札所 阪東第三番、岩
 のでらくわんぜんおん 殿寺 觀世音に御無沙汰のお詫を申し、道中無事と、念じ参
 らす。

此處を、發車の頃よりして、乗組の紳士、貴夫人、彼方此
 方に、フウくと空氣枕を親嘴する音。……

誰一人、横に成るなど場席はない。花枕、草枕、旅

ひまくら 枕、皮枕、縦に横に、硝子窓に押着けた形たるや、浮
 きぶくろ 嚢を取外した柄杓を持たぬものの如く、折から外のどし
 ぶり や降に、宛然人間の海月に似て居る。
 きた 喜多は一人、俯向いて、改良謙信袋の膝栗毛を、縞の
 うつむ 着ものの胡坐に開けた。スチユムの上に眞南風で、車内は蒸し
 あつ 暑いほどなれば、外套は脱いだと知るべし。
 おも ふと思ひついた頁を開く。——西國船の難船においらが叔
 ぢき 父的の彌次郎兵衛、生命懸の心願、象頭山に酒を斷つた
 のど を、咽喉もと過ぎた胸忘れ、丸龜の旅籠大物屋へ着くと早
 ちやぶくろ や、茶袋と土瓶の煮附、とつぱこのお汁、三番叟の吸もの
 あつかん で、熱爛と洒落のめすと、罰は靦面、反返つた可恐しさに、

恆規おきてにしたがひいちやふみん一夜不眠の立待たちまちして、お詫わびを申す處まをところへ、宵よひに小當こあたりに當あたつて置おいた、仇あだな年増としまがからかひくくに來くる條くぐである。

女をんな彌次郎やじらうが床とこの上うへにあがり、横よこになつて、此處こゝへ來こいと、手招てまねぎをして彌次郎やじらうをひやかす、彌次郎やじらうひとり氣きを揉もみ「エ、情なさけない、其處そこへ行いつて寢ねたくてもはじまらねえ、こんな事ことなら立待たちまちより寢ねまちにすればよかつたものを。女なん「何なんちふいはんす。私わしお嫌きらひぢやな、コレイナアどうぢやいな。「エ、こんな間まの悪わるい事ことあねえ、早はやく八やつを打うてばい、もう何なん時どきだの。女こゝ「九くのつでもあるか。彌次あ「まだ一いつ時ときだな、コレ有あり様やうは今夜こんやおいらは立待たちまちだから寢ねる事ことがならねえ、此處こゝへ來きな、立たつて居ゐ

ても談はなしが出来できやす。女「あほらしい、私わたしや立たつて居ゐて話はなしノウする事ことは、いやく。彌次「エ、そんならコウ鐵かなづ槌ちがあらば持もつて來きて貸かしねえ。女「オホホ、鐵かなさいこ槌づちの事ことかいな、ソレ何なんちふさんすのぢやいな。「イヤあの箱はこ枕まくらを此この柱はしらへうちつけて立たちながら寢ねるつもりだ。

かんが考かんがへると、(をかしてならん。)と一寸ちよつと京かみ阪がたの言葉ことばを眞ま似ねる。串じやうだん戲ぎではない。彌次郎やじらうが其その時代じだいには夢ゆめにも室くう氣き枕まくらの事ことなどは思おもふまい、と其處そこ等いらをすみはすと、又また一人ひとり々り々りが、風ふう船せんを頭あたまに括くわつて、ふはりくくと浮ういて居ゐる形かたちもある。是これしかしながら汽車きしやがやがて飛ひ行かう機きに成なつて、愛あた宕ご山やまから大おほ阪さかへ空そらを翔かける前ぜ

んべう

表であらう。いや、割床の方、……澤山おしげりなさい。

喜多は食堂へ飲酒に行く。……あの鐵の棒につかまつて、

ぶるツとしながら繋目の板を踏越すのは、長屋の露地の溝板

に地震と云ふ趣あり。雨は小留みに成る。

白服の姿勢で、ぴたりと留まつて、じろりと見る、給仕の氣

構に恐れをなして、

「日本の酒はござんせうか。……濟みませんが熱くなすつて。」

玉子の半熟、と誂へると、やがて皿にのつて、白服の手

からトンと湧いて、卓子の上へ顯れたのは、生々しい肉の切

味に、半熟の乗つたのである。——玉子は可いが、右の肉で、

うかつには手が着けられぬ。其處で、パンを一切焼いて貰つた。

ボリ／＼と噛みつゝ、手酌で、臺附の硝子杯を傾けたが、何故
 か、床の中で夜具を被つて、鹽煎餅をお樂にした幼児の時を
 思出す。夜もやゝ更けて、食堂の、白く伽藍としたあたり、
 ぐら／＼と揺れるのが、天井で鼠が騒ぐやうである。……矢
 張り旅はもの寂しい、酒の銘さへ、孝子正宗。可懐く成る、
 床しく成る、種痘が痒く成る。
 「坊やはいゝ兒だ寝ねしな。……と口の裡で子守唄は、我な
 がら殊勝である。

四

息子むすこの性せいは善ぜんにして、鬼神きしんに横道わうだうなしと雖いへども、二合半こなかふたむ傾ける
 と殊しゆしやう勝しょうでなく成なる。……即すなはち風かぜの聲こゑ、浪なみの音おと、流ながれの響ひびき、故こきや
 郷うを思おもひ、先祖せんぞ代々だいくを思おもひ、唯たゞ女によう房ぼうを偲しのぶべき夜半よはの音おと
 信づれさへ、窓まどのさまじさんざ、松まつ風かぜの濱はま松まつを過すぎ、豊とよ橋はしを越こす
 や、時ときや、經ふるに從したがつて、横よこ雲ぐもの空そら一いち文字もんじ、山やまかづら、霞かすみの
 二に字じ、雲くもも三み色いろに明あけ初そめて、十じふ人にん十じふ色いろに目めを覺さます。
 彼かの大だい自し然ぜんの、悠い然ぜんとして、土つちも水みづも新あたらしく清きよく目め覺ざむる
 に對たいして、欠あく伸びをし、鼻はなを鳴ならし、髯ひげを搔かき、涎よだれを切きつて、うよ
 くたなと柵かひの蠶こうの蠢ごめき出いづる有あり状さまは、醜わるく見み窄すぼらしいものである
 が、東しの雲のめの太たい陽やうの惠めぐみの、宛さな然ながら處しよ女ぢよの血ちの如ごとく、爽さわに薄うすく
 紅ねなるなるに、難ありがた、狐きつねとも成ならず、狸たぬきともならず、紳士しんしと成な

り、貴婦人となり、豪商となり、金鎖となり、荷物と成り、大なる鞆と成る。

鮭、お辨當、鯛めしの聲々、勇ましく、名古屋にて夜は全く明けて、室内も聊か寛ぎ、暖かに窓輝く。

米原は北陸線の分岐道とて、喜多にはひとり思出が多い。が、戸を開けると風が冷い。氣の所爲か、何爲もそゞろ寒い驛である。

「三千歳さん、お桐さん。」——風流懺法の女主人公と、もう一人見知越の祇園の美人に、停車場から鴨川越に、遙かに無線電話を送つた處は、然まで寢惚けたとも思はなかつたが、飛ぶやうに列車の過ぐる、小栗栖を窓から覗いて、あゝ、あす

こらの藪やぶから槍やりが出て、馬ば上じやうに堪たまらず武智光秀たけちみつひで、どうと落おちう
 人どから忠兵衛ちゆうべゑで、足あし拂はかど取とらぬ小笹原こささはらと、線路せんろの堤防どての枯草かれくさ
 を見みた料簡れうけん。——夢心地ゆめごちの背せをドンと一ひとツ撲ぶたれたやうに、
 そもく人口じんこう……萬まん、戸數こすう……萬まんなる、日本第二にっぽんだいにの大都だいとの大木おほ
きど戸きどに、色香いろかも梅うめの梅田うめだに着つく。
 ステツキ洋杖かみいれと紙入がまぐちと、墓口たばこいれと煙草入ぐわいたうを、外套したの下いっしに一
 所よに確乎しつぱと壓おさへながら、恭うやくしく切符きつぷと急行券きふかうけんを二枚持にまいもつて、
 餘あまりの人混雜ひとごみ、あとじさりに成なつたる形かたちは、我われながら、扱さて箔はくの
 ついたおのぼりさん。

家いへあり、妻つまあり、眷屬けんぞくあり、いろがあつて、金持かねもちで、大おほ阪かを一ひとのみに、停ステエシヨンまへ車場前まへを、さつくと、自動じどうしや車くるま、俵はつ

歩くのさへ電車より疾いまで、猶豫はらず、十字八方に捌ける人数を、羨しさうに視めながら、喜多八は曠野へ落ちた團栗で、とぼんとして立つて居た。

列が崩れてばらくと寄り、颯と飛ぶ俵の中の、俵の前へ漸と出て、

「行くかい。」

「へい、何方で、」と云ふのが、赤ら顔の髯もじやだが、莞爾と齒を見せた、人のよささうな親仁が嬉しく、

「道修町と云ふだがね。」

「ひや、同心町。」

「同心町ではなささうだよ、——保險會社のある處だがね

「保險會社ちふところは澤山あるで。」

「成程——町名に間違はない筈だが、言ひ方が違ふかな」

「何處です、旦那。」

「何ちふ處や。」と二人ばかり車夫が寄つて來る。當の親仁は、大な前齒で、唯にやく。

「……道は道だよ、修はをさむると、……憊う云ふ字だ。」

と習ひたての九字を切るやうな、指の先で掌へ書いて、次手に

道中安全、女難即滅の呪を唱へる。……

「分つた、そりや道修町や。」

「そら、^{きた}北や。」

「^{わか}分つたかね。」

「へい、^{だんな}旦那……^の乗んなはれ。」

大正七年十月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「新小説 第二十二年第十号」春陽堂

1918（大正7）年10月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「種痘」に対するルビの「しゅとう」と「うゑばうさう」の混在は、底本の通りです。

※表題は底本では、「大阪《おほさか》まで」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年7月27日作成

2018年8月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大阪まで

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>